

## 【論文】

## 〈足を洗う〉という表現が語る言語変化

## コーパスによるアプローチ

呉 琳\*

(北海道大学)

## 概要

各種コーパスに出現する「足を洗う」という表現について調査すると、多様な用法が見られた。そこにある種の言語変化が反映され、言語内的な要素と言語外的な要素が言語変化に影響を与えていることが示唆された。言語変化の全体像を把握するためには、複数の表現に対する調査が必要とされるが、本研究では、まずこうした個別事例を取り上げ、心理や社会の認識を含む視点から検証することで、言語変化へのアプローチを試みた。

先行研究が指摘した如く、コーパスは辞書記述の精緻化や内容の改訂において絶大な力をもっている。本研究においても、コーパスを活用することによって、「足を洗う」の使用実態が解明でき、個人の内省を大幅に超える情報源が有効であることを指摘した。今後、コーパスから獲得した有益な情報をより正確な辞書記述や教材開発に活用することが期待される。

Copyright © 2015 by Association for Language and Cultural Education

キーワード 言語変化, 要因, 〈足を洗う〉, コーパス, 用例分析

日々刻々と変化する社会のなかで、人々の言語意識も変化するものである。日本語を問題にして考える場合にも、それらの状況への十分な認識が必要

である。本研究は、このことを念頭に置き、慣用句<sup>1</sup>「足を洗う」を1つの具体的な事例として分析を

本研究は、中国国家留学基金委/日本電通育英会の支援による研究成果の一部である。

\* E-mail: gorin0819@hotmail.co.jp

<sup>1</sup> 慣用句という用語に対し、様々な立場から定義がなされてきた。これについて宮地(1982)は、「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉だ」と慣用句の定義を述べる。この定義は現在まで広く引用され、多くの賛同を得ているため、本研究もこの定義に従う。なお、慣用句としての意味の成立には、比喩が重要な役割を果たしている。したがって、後述するように、慣用句を一種の比喩表現とみなすことができる。

行っただけで、意味・用法を中心とした言語変化<sup>2</sup>の要因に関する考察を加える。

筆者が「足を洗う」という表現に興味を持ったきっかけは、手元にある二冊の辞書を調べ、その記述の食い違いに気付いたことである。まず、『日本語慣用句辞典』（米川、大谷、2005、pp. 15-16）では、「好ましくない職業・事柄・生活を断って離れてよい状態になる。好ましくない事柄は必ずしも社会的評価によるものではなく、話者の評価による。心理的にきっぱりと離れてという意識が強い時には、一般的には好ましくないとは考えられないことにも使う」という解説がなされる。そして、後者の例文として2例確認される。

一方、『明鏡ことわざ成句使い方辞典』（北原、2007、p. 12）では、この慣用句を解釈した後、「単に離れる意で使うのは不適切」と指摘し、誤用例として、「制作部から足を洗って、経理部に異動になりました」と「教育の世界から足を洗ってもうだいたいぶたつ」の2例を挙げる。つまり、この慣用句は悪事をやめる意味のほかに、ただ仕事をやめる意味でも使えるのか、両辞典で相反する解説がなされる。

この食い違いは伝統的な形式と新来の形式の対立である。通常は前者が社会的に優位な立場にあり、日本語の規範を支配しているため、日本語教育のなかではその規範に従って伝統的な形式が扱われることが多い。言語変化によって生じつつある新たな形を日本語教育に導入するか否かは、学習者のニーズや置かれた環境との関連で決める必要がある<sup>3</sup>。中

<sup>2</sup> 「ことばの意味と形式の結びつきは恣意的であるという、ことばのもつ根元的な特徴を背景にして、言語は、つねに変化の可能性をもっている。現代日本語のなかでも、現在、さまざまなレベルで変化が進行しつつある。」（『新版日本語教育事典』の「現代の言語変化」の項。渋谷勝己、2005、pp. 464-465）たとえば、音声面や文法面などで変化が起こっているが、本研究は意味・用法を中心とした言語変化に着目したい。

<sup>3</sup> 詳細は、『新版日本語教育事典』の「現代の言語変化」の項を参照されたい。

国人の日本語学習者からみると、日本語の「足を洗う」は中国語の「洗手不干」<sup>4</sup>に相当すると思われるため、悪事以外に使用するの是不自然に感じられるかもしれない（少なくとも、筆者の語感では、中立的な要素における「足を洗う」の使用に抵抗を覚える）。そうすると、この表現の意味・用法を考察し、学習者に説明する必要がある。

用例を調査したところ、悪事以外に使用するものも多く見られた。それは、社会状況の移り変わりと一緒に伴う人々の言語意識の変化に応じて言葉も変化するからである。特に慣用句の場合は、社会習慣や文化と結びついて生まれる表現形式である。慣用句が社会のなかで使われる以上、社会の変化が慣用句のあり方に影響を与える。本研究では、悪事にしか使用できないはずの慣用句「足を洗う」が悪事以外にも使用できるように用法が拡大したことを一種の言語変化として捉え、用例分析を通してその要因を探る。

## 1. 本研究の調査資料

ある言葉の意味を調査する際、おそらく辞書は、その最も初歩的かつ基礎的な道具となる。辞書は、個々の言葉の発音・意味・用例など、さまざまな情報を提示し、語彙学習上欠かせない道具である。外国語学習においても、重要な役割を果たしていることは言うまでもない。一方、上に見てきたように、辞書の解説には各種の相違が見られ、学習者を混乱させてしまうこともある。

では、辞書の記述に食い違いが生じる場合、言葉の意味・用法をどのように捉えればよいのか。少数の用例ではその言葉の使用実態を完全に反映できないし、個人の母語話者の内省だけに依存したのでは

<sup>4</sup> これは「手を洗ってもうしない」という意味から転じて、悪事から手を引くことを表す四字熟語である。窃盗などの犯罪に使うのが一般的な用法である。

やはり捉えきれない。このような言葉の諸相を正確に把握するためには、多数の用例を集めることが必要である。その試みとして、本研究では、豊富な実例を有するコーパス<sup>5</sup>から用例採集を行う。調査資料については、稿末の「調査資料」を参照されたい。

以下、分析の手順として、まず、代表的な国語辞典の意味記述を確認することにより、「足を洗う」の意味・用法を分類する（第2章）。次いで、各種コーパスからの用例採集を行った上で、「足を洗う」の意味・用法を例示しつつ検討し、この表現の使用実態を探る（第3章、第4章）。そして、言語変化の要因を解明し（第5章）、全体の内容をまとめる（第6章）。

## 2. 「足を洗う」の意味・用法の分類

「足を洗う」という表現を『日本国語大辞典第2版』（日本国語大辞典第2版編集委員会、小学館国語辞典編集部、2000、第1巻p.295）は、「(汚れた足を洗うように) 悪事や、好ましくない職業の世界から抜け出ることという語」と解説した上で、さら

に2つの意味を取り上げる<sup>6</sup>。

①娼妓、芸人などが、勤めをやめて堅気になる。

(例文省略)

②世間の人のいやがるような、良くない仕事をやめる。好ましくない行為をやめる。現代では、煩わしい仕事などをやめる場合にも用いる。(例文省略)

これを見ると、意味が2つに細分化されているが、しかし、①が②の一部として含まれるとも考えられ、その違いはあまり明確ではない。また、この区分はほかの国語辞典の多くでは採用されていない。たとえば、『広辞苑』第6版（新村、2008、p.44）<sup>7</sup>などこれに相当する語義を1つにまとめる辞典が少なくない。本論の趣旨からもこうした区分の必要が認められないため、以下においては、この解釈を第一義として取り扱い、「足を洗う①」と表記する。

しかし、この慣用句は日常の使用に伴い、意味・用法が変化し、現在では、次章以降に見るような豊富な実例があり、その意味・用法は「足を洗う①」が示唆するような語義に帰すことができない。この点に関して、『広辞苑』第6版は、「単にある職業を

<sup>5</sup> コーパスとは、「大規模に収集され電子化された言語資料」のことである。狭義には、研究目的で設計され、話し手・書き手に関する情報や単語の品詞情報、文の係り受け情報などの研究に資する情報を付与した言語資料のことを指すが、広義には、電子化されたテキストを単に収集しただけの言語資料も含む。調査資料に掲げたコーパスのなかで、(3)の国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』モニター公開データ(2009年度版)を除くと、ほかのコーパスは新聞、雑誌、小説といった特定のジャンルのテキストを機械可読化したものであり、日本語に対する代表性を持たないため、狭義の「コーパス」とは言えない(後藤、1995; 杉本、2010; 砂川、2010)。本研究では、広義に従い、こういった電子化された言語資料を全部含めて「コーパス」と言う。

<sup>6</sup> 意味・用法に関する解釈のほかに、慣用句の由来に関する情報もよく辞書に記述される。今回の調査対象「足を洗う」という慣用句の由来について、諸説が見られる。おそらくこの慣用句は汚れた足を洗い清めることに由来することは間違いないだろうが、誰が汚れた足を洗い清めるのかという点については、諸説がある。一説によれば、僧が一日の托鉢のあと、寺へ入るために足を洗うことから出たという。これをインドの托鉢僧と特定する説もある。もう一説は、中国古典の「洗足」や「濯足」を語源とするものである。また、客が旅館に入る前に足の汚れを洗うことから由来したという説もある。本研究では、その由来について言及するにとどめておく。

<sup>7</sup> その解釈は、「賤しい勤めをやめて堅気になる。悪い所行をやめてまじめになる。また、単にある職業をやめることにもいう。」とある。

表1 現代日本語における「足を洗う」の用例

	朝日	毎日	読売	BCCWJ	通算
用例の異なり数 (記事数)	818 (775)	473 (456)	515 (477)	57 (-)	1863
除外した用例	75	46	54	10	185
文字通りの意味	238	144	170	22	574
「足を洗う①」	327	192	182	17	718
「足を洗う②」	168	89	93	8	358
その他	10	2	16	0	28

注. 朝日新聞は1984年, 毎日新聞は1987年, 読売新聞は1986年から全文記事テキストの検索が可能になった。また, 著作権などの関係で本文を表示できない記事は, 朝日新聞に1件, 読売新聞に101件あった。

やめることにもいう」と解説している。この語義の「足を洗う①」との関係は同辞典では明記されないが, これが「足を洗う①」から意味・用法が派生したことは明白であろう。以下では, この表現が派生した意味・用法をも視野に入れ, 「足を洗う②」と表記する。つまり, 慣用句「足を洗う」には以下の2つの意味が含まれる。

足を洗う①: 悪事やよくない仕事をやめる

足を洗う②: 現在の職業をやめる

ただし, このように分類すると, 「足を洗う①」と「足を洗う②」とは, 排他的な関係としてではなく, むしろ「足を洗う①」が「足を洗う②」の意味領域に含まれる分類となる。したがって, 本研究では, 用例分類上の便宜を考え, この2つの意味を排他的な関係に位置付けるため, 「足を洗う②」の指す「現在の職業」を「悪事やよくない仕事とは言えない職業」に限定することにする。つまり, 上記2つの意味に若干修正を加え,

足を洗う①: 悪事やよくない仕事をやめる

足を洗う②: 悪事やよくない仕事とは言えない,  
現在の職業をやめる

と考えるのが説明のためには適当なようである。たとえば, 「裏社会から足を洗う」なら「足を洗う①」と考えるのが妥当であるが, 「政界から足を洗う」ならむしろ「足を洗う②」が妥当であろう。

### 3. 現代語における用例

上に述べた分類に基づき, まず, 新聞記事データベース及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下においてはこのコーパスの英語名“Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese”の略語「BCCWJ」を用いてこのコーパスを指すこととする)から現代語における用例を採集する。なお, 新聞記事の用例は朝日新聞『聞蔵Ⅱビジュアル』, 毎日新聞『毎索(マイサク)』, 読売新聞『ヨミダス歴史館』にアクセスし, 全文記事テキストの収録開始日から2014年までの記事を検索したものである(著作権などの関係で本文を表示できない記事は除いた)。表1はその調査結果である<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> 除外した用例は, 「手足を洗う」, 「手足を洗濯物で縛る」, 「足を洗い清める」, 「能力不足をあらわにした」など別語の一部で不適例と見るべきものである。また, その他の用例として, メタ言語的なもの, 意味不明のもの, 判断にゆれが生じるもの, そして本研究で取り上げる意味とはまったく別の意味を表すものが挙げられる。

いずれのコーパスにおいても、「足を洗う」という表現を慣用句として使用する割合が約半分を占める結果となっている。さらに、慣用句として使用する時、3例に1例は「足を洗う②」の意味に用いられているのである。「足を洗う②」の正誤はともかく、それが新聞記事や小説において一定の頻度で出現していることは事実である。

もう1つの特徴として注目されたいのは、新聞記事データベースにおいて、「足を洗う①」と「足を洗う②」はいずれも会話文<sup>9</sup>に多く出現することである。その原因は報道記事に引用文が多用されるからである。人物の会話を直接、あるいは間接引用したと容易に観察できる用例もあれば、どちらか不明のものもある。会話文が豊富なものには、新聞記事のほかに小説もあると思われるが、BCCWJにおいてはそのような特徴が反映されなかった<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> ここに言う「会話文」とは、実際の会話のなかで発話された文のことを指す。朝日新聞の場合、引用符を目印に、そこから断片的な引用の場合など、不明のものを除いた結果、「足を洗う①」が128例、「足を洗う②」が59例であった。しかし、この数字の中には人物の会話ではなく、手紙から引用したとも考えられる例もあるため、正確な数字を出すにはまだ検討の余地がある。

<sup>10</sup> 脚注9と同様に数えた結果、BCCWJにおける会話文に出現した「足を洗う①」が4例(2つの文学作品から2例ずつ)、「足を洗う②」がなかった。この点について、まず新聞記事データベースとBCCWJは母集団の大きさが異なることを断っておきたい。新聞の種類や年によって大きさは異なるが、最近の新聞1年分の記事はおよそ6000万字ある(田野村, 2009)のに対し、本研究で使用したBCCWJモニター公開データ(2009年度版)は合計4520万語からなる(村田, 山崎, 2011)。「文字数」と「語数」とは異なる単位であるため、厳密な比較を行うには、単位を揃えなければならないが、おおざっぱに言うと、新聞記事データベース30年間の文字数はBCCWJより大きいことが予想されよう。ところが、上に述べた特徴が反映されなかった理由として、母集団の大きさよりもレジスターの特徴のほうが大きな影響を与えていると思われる。すなわち、新聞における引用文と小説等における会話文との異なりによるものである。本研究では、レジスターによる使用差については言及するにとどめておく。今後、別の機会に詳しく論じたい。

以下、用例分析は朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』から得たものを中心に行う。用例は同新聞1984年から2014年までの約30年間の記事から検索したものである。表記のゆれと動詞の活用形を考慮して「足を洗+足をあら+あしを洗+あしをあら+アシを洗+アシをあら」で検索したところ、全部で775件の記事がヒットした。しかし、この数字はあくまでも記事の総件数を表すものであり、「足を洗う」の用例数を数えたものではない。たとえば、同一の記事において、複数の箇所に検索語が異なる意味として現れることや同じ出来事が複数の記事により取り上げられることがある。

表1に示した如く、筆者が目視で用例を確認し、異なり数を数えたところ、全部で818例という数にのぼる。そのなかで、除外した用例が75例、「足の汚れを洗い落す」という文字通りの意味に使用されるものが238例、「足を洗う①」が327例、「足を洗う②」が168例、その他が10例であった。

数々の用例はその文脈に応じてさまざまな使われ方をしているが、比較的頻繁に現れる用法とそうでないものがあることもこの表現の使用実態である。実例においては書き手、または話し手がどのような意図をもって「足を洗う」という慣用句を用いているか判然としない場合もある。もとよりこの慣用句は比喩から生まれたものであるため、比喩的な用法に使う場合、可能な使い方を網羅するのは事実上不可能である。以下では、「足を洗う①」、「足を洗う②」のなかで目立つタイプを抽出して記述する。

### 3. 1. 「足を洗う①」の用例

実例からみると、「〈動作主〉が〈対象〉から／の足を洗う」という文型をとるものが多い。これは、「足を洗う②」でも「政界から足を洗う」などの例があるから、「足を洗う①」の固有の特徴ではない。〈対象〉に当たる要素を整理した結果、「足を洗う

①」は暴力団・やくざ (131)<sup>11</sup>と共起することが最も多く、強盗・スリ・泥棒 (37)、競馬・パチスロ・パチンコ・ポーカー・マーじゃんといったギャンブルに関わる用語 (19) がそれに次ぐことが明らかになった。ほかに総会屋 (9)、暴走族 (7) など比較的多く共起する要素もあるが、ほとんどの要素 (「愛人暮らし」, 「アウトローの世界」, 「核実験」など) は使用度数<sup>12</sup>が1回のみとなっている。

このように、〈対象〉に当たる要素は、頻繁に用いられるものから1回しか現れないものまでさまざまある。本研究では、それらの要素が繰り返され定着する度合いを「定着度」として捉える。すると、使用度数の多少から〈対象〉に当たる要素の定着度が窺われる。すなわち、使用度数の多い要素は想起されやすく、定着度が高いが、使用度数の少ない要素は想起されにくく、定着度が低い。以下、(1)～(6)は3例ずつ使用度数の多い例と使用度数の少ない例に対応する。

- (1) 十日午前九時二十分ごろ、三十歳くらいの男性の声で「ヤクザから足を洗うことにし

た。JR 上尾駅東口のロッカーにけん銃を入れた。他の者に使われるとまずいので、警察で処分してくれ」と上尾署に通報があった。(1995/11/11 朝刊)

(2) 福岡県の大物女性スリ (69) が、足を洗う覚悟をした。意を決して 202 件、総額 1 千万円の余罪を自供し、罪を償うと誓った。(2002/07/02 朝刊)

(3) 結婚してからはパチンコから完全に足を洗った。(2014/11/21 週刊)

(4) 「貧乏床屋の跡継ぎで、上の学校へ行くどころじゃねえさ」。(中略)ただ、35 歳で「貧乏床屋」の足を洗い、7、8 年、織物行商の旅に出て書いた小説「狐と狸」は 2 度映画化。(1991/08/10 夕刊)

(5) おかげで私は、長い浪人生活の足を洗うことが出来たわけだ。(2000/11/19 朝刊)

(6) 残りの 17 ライを売ってもいいよ」とチェンライ県サマンニット村の農民△△さん (53) は笑った。借金漬けの農業から足を洗いたいためでもある。(1991/09/13 朝刊)

「足を洗う①」の用例には、次の 2 つのタイプがあり、区別しなければならない。〈対象〉と悪事の結びつきを手掛かりに分類すると、1 つめは、〈対象〉が悪事と結びつきやすく、否定的な意味を表すタイプである (例 1～3)。2 つめは、〈対象〉が悪事と結びつきにくく、必ずしも否定的なものではないが、修飾語の力を借りて否定的なものに傾くタイプである (例 4～6)。

たとえば、例 (4) の「床屋」は「ヘアサロン」や「美容室」に比べ、おしゃれではないというマイナスなイメージをもつが、言葉自体は否定的な意味をもたない。「貧乏」と連結してはじめて否定的な評価に移行する。それに加え、(作家の熊王徳平さんが) 貧乏床屋の跡を継ぐことで、(小学校卒業

<sup>11</sup> 括弧内の数字は用例数を示したものである。なお、「暴力団」, 「ヤクザ」, 「極道」のような類似の要素は同じ項目内にまとめた。また、それらの変形 (「ヤクザ稼業」, 「ヤクザ社会」, 「ヤクザ生活」, 「ヤクザ組織」, 「ヤクザの世界」, あるいは、「やくざ」という語の表記をカタカナにするかひらがなにするか) は使い分けられているようにも見えないため、筆者は「暴力団・やくざ (131)」のように、そういった多様なものを一括りにしてまとめた。

<sup>12</sup> 荻野 (2007, p. 43) によると、語彙調査の結果から得られる情報として、「いる」とか「山」とかのそれぞれの語について何回出てきたかを使用度数という。度数の多い順に並べて順位をつけたものを度数順位という。本研究の調査では、全ての用例が「〈動作主〉が〈対象〉から／の足を洗う」という文型をとるわけではないため、この文型をとらない用例に対しては、前後の文脈を踏まえ、この文型に復元する処置を講じた。〈対象〉に当たる要素の度数順位は稿末の添付資料に掲げる。

後)上の学校へ行くことができなかった。床屋をやめて作品作りに集中するのは、「よくない仕事を離れてよい状態になる」という慣用語辞典の解説に合致する。

上に挙げた例のほかにも、「悪徳業者」,「お酒一辺倒」,「大量飲酒の習慣」,「負の資産」など連語関係を含む要素が見られる。これらの要素は否定的な意味をもつ修飾語によって修飾され、否定的な状態へ移行してしまい、「足を洗う①」と共起できるようになる。その一方で、前掲した例(1)～(3)は常に社会的評価がよくないため、修飾語に依存する必要がない。定着度が高いのはこの原因によると考えられる。

### 3. 2. 「足を洗う②」の用例

「足を洗う②」について、〈対象〉に当たる要素を整理した結果、政治(25)と共起することが最も多く、役者・映画・俳優といった芸能界関係の用語(16)、サッカー・水泳・野球といったスポーツ関係の用語(14)がそれに次ぎ、これらの要素は定着度が高い。

一方、使用度数が1回の要素が多く見られ、内容にもさまざまなバリエーションがある。ビジネスや株式投資、証券会社など具体的な仕事を指す用語以外にも、「ハトレースの趣味」や「アユ釣り」のような趣味を表す用語、及び「馬」,「熱帯魚」,「電気」のような趣味として時間や精力を費やしてきたと想定できる用語、そして、「九州」,「カンボジア」,「港」のような地名や場所を表す用語がある。以下、(7)～(12)は3例ずつ使用度数の多い例と使用度数の少ない例に対応する。

(7) 市長選への出馬を要請する6万人を越す署名に心が動いた。「負けたら、政治から足を洗う」と周りに宣言。退路を断って選挙戦を戦い、現職を破った。(2003/04/22 朝刊)

(8) 黒沢さんの「酔いどれ天使」が出た時には、打ちのめされた思いで、「こんな見事な作品はぼくには撮れない。もう映画から足を洗おうか」と真剣に悩んだりしました。(1991/03/22 夕刊)

(9) この四年後のメキシコを最後に、飯島は短距離ランナーから足を洗った。人生は流転する。(1994/02/07 夕刊)

(10) 《万歳の声と拍手に送られて栄転者はうれしそうに小倉駅から去ってゆく。駅頭では残留組に、君も早く九州から足を洗って戻ってこいとか言い合う。「半生の記」》(2009/09/05 朝刊)

(11) この二、三年、は虫類に関する問い合わせはなくなり、熱帯魚から足を洗った客も多い。客単価はピーク時から半減。(1998/01/11 朝刊)

(12) 「うどんから足を洗ってくれ」(中略)2代目の常勤社長には無類のうどん好きが就いた。(2013/05/06 朝刊)

同様に、〈対象〉と悪事の結びつきを手掛かりにして、2つのタイプに分けることができる。1つめは、〈対象〉が悪事と結びつきにくく、否定的な意味を表す修飾関係が希薄になったタイプである(例7～9)。例(7)の連語関係を復元すると、「負けたら、プレッシャーのある政治から足を洗う」という一文になる。政治は通常、よくない仕事とは思えない。それにもかかわらず、あえて「政治から足を洗う」と表現するのは、話し手自身が好ましくないとして強く主張しようとしているからである。

2つめは〈対象〉が悪事と結びつかず、話者の意図により否定的な意味に移行するタイプである(例10～12)。例(10)の「九州」は悪事やよくない仕事へと連想できない。そこには書き手自身の判断が働いており、修飾関係がなくても、悪事やよくない

ことを訴えようとしている。九州は東京から遠く離れるから、それが好ましくないのかもしれない。しかし、これが話し手の意図した内容と同一であるという保証はない。このタイプの例のなかには、かなりの推論を巡らしてはじめて内容が想定できる用例が少なくない。上に挙げた例のほかにも、「山」、「大学」などがある。これらの要素は話し手や書き手自身の判断によりよくないとされ、「足を洗う②」と共起できるようになる。

また、「足を洗う②」には、“足を洗う”や「足を洗う」のように、引用符やかぎかっこでくくって表記するものが数例ある。

(13) △△さんは 1990 年代、スターごとに自発的につくられるファンクラブに入って活動。3 年前「足を洗う」まで、1 カ月公演で 20 回、多いときは毎日見ていたという。(2011/08/31 夕刊)

(14) △△さん (五八) はアイスホッケー選手として高校時代から社会人一年目まで国体に五回出場し、早大時代には大学選手権で優勝した経歴の持ち主だ。その後、仕事が忙しくなり「足を洗っていた」が、十三年ほど前、四十歳以上を対象にした東京都のリーグに入り、現役にカムバックした。(2000/05/27 夕刊)

これらの例で言及したファンクラブで活動すること、アイスホッケー選手として活躍することは好ましくないことや状態とは言えない。したがって、「足を洗う」に引用符がつけられる。これは、書き手側に本来の用法である「足を洗う①」に合致しないことがまだ意識されているからである。結局、「足を洗う②」は十分な例があり、一般の国語辞典が認知する語義である一方で、本来の用法の外延であるという意識も依然として生きているという興味

深い状態にあると言える。

#### 4. 「足を洗う」の歴史的変遷

##### 4. 1. 近世までの用例

まず、『日本古典文学』と『断本』を調査し<sup>13</sup>、近世までの用例を観察する。その結果、前者には 18 例、後者には 5 例があった。この 23 例のうち、不適例として除外されたものが 2 例、文字通りの意味に使用されるものが 18 例、「足を洗う①」が 3 例、「足を洗う②」の用例がなかった。以下、「足を洗う①」の 3 例を引用する。

(15) 凡而、ことの十分なるは、欠るの兆、九分なるは充るの首なれば、八の数を以て、永久の嘉瑞とし、ものゝめでたき極位与する事は、先大江都の八百八町、長にして尽ず。(中略) 予が膝栗毛も此八編に至て足を洗ひ、引込思案の筆をおくこと、(後略) (十返舎一九『東海道中膝栗毛』1802~1822/1958, p. 424)

(16) 嗟呼疖癩のしのびごま、看官汐合のほどをはかりて、よろしくおかぶらの足を洗ひ、引込時ぶんの間を見合せ、野暮と化物にたとへらるゝことなかれ。(為永春水『春色梅兒譽美』1832~1833/1962, p. 83)

(17) 一晚に、三千両は愚かな事、千両でもかためちゃア、減多に盗めるものじゃアねへ。そこでこゝが止時と、仲間の者にも分けてやり、足を洗って其金から、思い附いての貸附會所。(河竹黙阿弥『小袖曾我薊色縫』1859/1961, p. 433)

<sup>13</sup> 日本古典文学大系(岩波書店)と断本大系(東京堂出版)の用例検索については、国文学研究資料館の『大系本文データベース』検索システムを利用した。詳細は稿末参照。なお、引用の際は、原本と照合した上で引用した。



表2 近代語における「足を洗う」の用例

	青空	太陽	女性	明六	国民	通算
用例数	66	14	6	0	1	87
除外した用例	1	1	1	0	0	3
文字通りの意味	37	7	3	0	0	47
「足を洗う①」	27	5	1	0	1	34
「足を洗う②」	1	1	1	0	0	3

注. 青空, 太陽, 女性, 明六, 国民はそれぞれ『青空文庫』, 『太陽コーパス』, 『近代女性雑誌コーパス』, 『明六雑誌コーパス』, 『国民之友コーパス』の略である。

この3例において、〈対象〉に当たる要素は「引込思案の筆」, 「遊郭」と「盗人」である。例(15)は「足を洗う①」のタイプ2, 例(16)と(17)は「足を洗う①」のタイプ1に含まれる。

また、『日本国語大辞典第2版』に掲載された用例のうち、近世までのものとして次の3例が挙げられる。例(18)の〈対象〉は「げす」で、当時げすは低い身分とされるゆえ、「足を洗う①」のタイプ1に含まれる。例(19)と(20)の〈対象〉に当たる要素を原文から確認すると、それぞれ「女郎買をして金を使う野暮」と「唄妓」(げいしゃ)であり、「足を洗う①」のタイプ1に含まれる。

(18) 「げすがさぶらいに足をあらうて、上らうまじりをするぞ」(玉塵抄, 1563)

(19) 「若い内にちっと修行して見て早く足を洗ふがいい」(浮世床・式亭三馬, 1813～1823/1971, p. 303)

(20) 「私(わちき)が足を洗って素人(しろうと)にさへなりゃア」(人情本・春色梅美婦禰 1841～1842頃/1928, p. 847)

今回の調査範囲で、「足を洗う①」の初出例は例(18)であり、タイプ1に含まれる。なお、タイプ2の初出例は例(15)である。

#### 4. 2. 近代の用例

次いで、近代の用例を調査することにより、「足を洗う②」の初出例を遡る。表2に示した如く、近代語のコーパス<sup>14</sup>における「足を洗う」の有効な用例数が少なく、「足を洗う②」の意味に用いられる用例の割合が非常に低い。該当の3例はそれぞれ『青空文庫』, 『太陽コーパス』, 『近代女性雑誌コーパス』から検索された(ルビは省略する)。

(21) 近頃相川の怠ることは会社内でも評判に成っている。(中略)外国文書の翻訳, それが彼の担当する日々の勤務であった。足を洗おう, 早く——この思想は近頃になって殊に烈しく彼の胸中を往来する。(中略)彼は長い長い腰弁生活に飽き疲れて了った。(島崎藤村『並木』1907)

(22) 政黨は二十年間に於て種々に變遷したり。(中略)日本政黨の開山と仰がる、板垣大隈二伯の却つて足を洗ひ、全たく黨界と交渉なきに至れるごとき、變遷の最も著るしきものとす。(浅田江村「政治、外交」『太陽』1909年04号)

(23) 最初は天職と信じた教師も、年が年中紋切

<sup>14</sup> 近代語における用例の検索は、『青空文庫』, 『太陽コーパス』, 『近代女性雑誌コーパス』, 『明六雑誌コーパス』, 『国民之友コーパス』を利用した。詳細は稿末参照。

## 文型 【〈動作主〉が〈対象〉から／の足を洗う】

〈対象〉と悪事の結びつき



図1 4つのタイプからみる「足を洗う」の用例

形で、幕なしにやつてみてはウンザリする事なきにあらず。(中略)『皆さん。わかつた方は手をお上げなさい』なんかと云つても居れぬ。こゝに誘ふ水あらば、運ぶに任せておさらば、さらばと、学校から足を洗ふて、家庭の人となるのである。(河岡潮風「御茶の水評判記」『女学世界』1909年03号)

この3例において、〈対象〉に当たる要素は「外国文書の翻訳」、「政党」と「学校」である。前に修飾関係が見当たらないが、例(21)は「煩わしい外国文書の翻訳仕事」、例(22)は「離合集散の激しい政党」、例(23)は「ウンザリする学校」のように復元でき、「足を洗う②」のタイプ1に含まれる。なお、調査範囲で「足を洗う②」の初出例は例(21)であり、タイプ1に含まれる。

## 5. 「足を洗う②」の生じた原因

前に述べたとおり、〈対象〉に当たる要素を整理した結果、いくつかの目立つタイプが認められた。これらのタイプはそれぞれ独立しているものではなく、むしろ互いに連続性を帯びているのである。次の図1に示す(実線の楕円は使用度数が多く定着度が高いもの、点線の楕円は使用度数が少なく定着度が低いものを示す)。

前述のとおり、「足を洗う①」は〈対象〉が悪事と結びつきやすく、否定的な意味を表すタイプ1と、〈対象〉が悪事と結びつきにくく、必ずしも否定的なものではないが、修飾語の力を借りて否定的なものに傾くタイプ2に分けられる。「足を洗う②」は〈対象〉が悪事と結びつきにくく、否定的な意味を表す修飾関係が希薄になったタイプ1と、〈対象〉が悪事と結びつかず、否定的な意味を表す修飾関係の復元が困難で、話者の意図により否定的な意味に移行するタイプ2に分けられる。

図1では、悪事との結びつきが強い〈対象〉と悪事との結びつきが弱い〈対象〉が1つのベクトルの端と端に位置する。強弱の判断基準は「足を洗う」の意味分類によって異なる。「足を洗う①」は社会的評価に基づき判断される。社会的評価により悪事との結びつきが強いと判断される場合、〈対象〉の定着度が高い(タイプ1)。結びつきが弱い、否定的な意味をもつ修飾語に修飾されて否定的な意味へ移行する場合、〈対象〉の定着度が低い(タイプ2)。一方、「足を洗う②」は心理的評価に基づき判断される。話し手の意図した内容がより簡単に復元できる場合、〈対象〉の定着度が高い(タイプ1)。話し手の意図した内容を復元するのが困難な場合、〈対象〉の定着度が低い(タイプ2)。

言語内的な要素から解釈すると、社会的評価はともかくとして、心理的にきっぱりと離れたいという

話者の意識が強い時、「足を洗う②」にもそれなりの合理性があるということである。その結果、最初は修飾語に依存しつつ特定の文脈のみで起こった変化が、徐々にスケールを広げて全般的な変化になっていったであろう。

意味変化の方向性はさまざまであり、そこから一般性を見出すのは難しいが、「足を洗う」という表現に関して言えば、この言葉は、ある限定された特殊な意味・用法から一般的な意味・用法に広がっていく方向性を見せる。限定された特殊な意味とは、もともと、娼妓など特殊な仕事に使用され、好ましくないという価値判断を含んでいたことを指す。それが、現在、好ましいという価値判断を含む仕事にも使用できるようになった。

この変化はあるとき、突然言語社会の全体にわたって発生するわけではない。やはり、最初是一部の話し手が新しい用法を導入し、徐々にほかの話し手にそれが広がっていったのであろう。たとえば、前掲(21)は島崎藤村による用例であるが、同じく島崎藤村によるほかの用例が『日本国語大辞典第2版』(日本国語大辞典第2版編集委員会, 小学館国語辞典編集部, 2000, 第1巻 p. 295)から見つかった。「何時(いつ)まで政界に泳いで居る積りは無いのです。一日も早く足を洗ひたいと」(『破戒』1906)とあり、「足を洗う②」の代表例である。島崎藤村によるこの2例は出現年代もかなり近い。島崎藤村がこの「一部の話し手」(この場合は書き手である)と言えよう。一部の話し手が新しい用法を広げたというのは、言語外的な要素による言語変化のプロセスである。

もう1つの言語外的な要素は社会的側面から考えなければならない。どんな仕事であってもよいことばかりというわけではない。たとえそれが好きな仕事であっても、いつの間にかいやになってしまうことがある。3. 2. に見てきたように、「足を洗う②」は政界・芸能界・スポーツ界などに頻繁に使用

される傾向がある。新聞記事データベースはこういった分野の記事に集中しがちなため、ここでは用例数の多寡は問題にせず、前後文脈にどんな共通性が見られるかということを考えてみたい。

まず、これらの仕事はヤクザや強盗とは異なり、華やかな仕事である。給与が高く、社会になんらかの貢献、あるいは影響を与える。しかし、華やかな仕事だからこそ世間に注目され、ちょっとしたミスで世間からバッシングを受けることもある。給与が高いとはいえ、それなりに仕事のペースも早く、自分の家族や趣味などを犠牲にする覚悟も必要である。冒頭に言及したように、慣用句は社会や文化と深く関わっている。「足を洗う②」という用法は、現在私たちが置かれた社会的状況を背景にして生じてきたものであると思われる。

## 6. 本研究のまとめと今後の課題

用例分析から明らかになったことを次にまとめる。

第一に、この慣用句について、悪事やよくない仕事をやめる意味で用いられる用法を「足を洗う①」、悪事とは言えない、ただ現在の職業をやめる意味で用いられる用法を「足を洗う②」と区別するならば、現代日本語においては、およそ3例に1例が「足を洗う②」の用法で用いられることが分かった。

第二に、「足を洗う①」は暴力団・やくざと共起することが最も多く、泥棒・強盗・スリ、ギャンブル類の用語がそれに次ぐ。「足を洗う②」は政治と共起することが最も多く、芸能界、スポーツ関係の用語がそれに次ぐ。

第三に、「足を洗う②」の成立は、この表現そのものにある合理性という言語内的な要素、及び使用者属性の変化や社会的評価から話者の心理的評価へと判断基準が移行するという言語外的な要素に起因

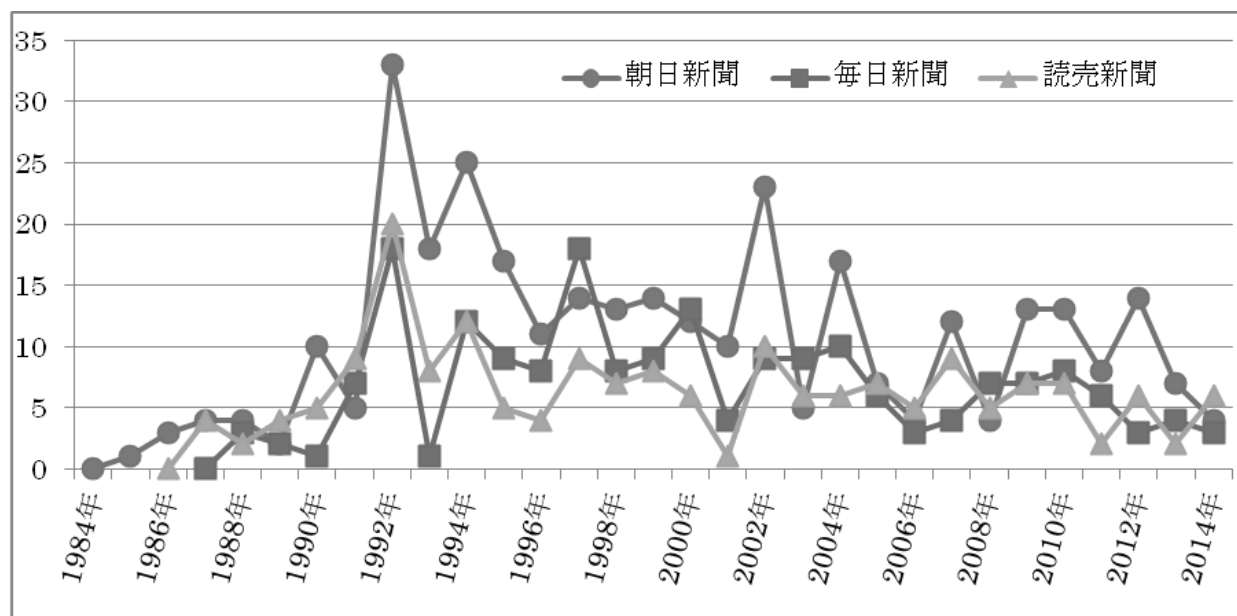


図2 「足を洗う①」用例数の年間推移

する。

こうした情報は大きな手掛かりとなり、慣用語の意味記述や例文の選択に役立ち、辞書記述へ応用できる。コーパスに基づく実証的な分析によって、自然な文脈における現実の使われ方を記述し、規範的な使われ方と対比させることができる。そして、個人の母語話者の意味・用法に対する内省に頼ることなく、学習者が会える可能性の高い意味・用法を示してくれるのである。こうした情報を盛り込み、より正確な辞書や教材を開発することができる。意味・用法に関する情報以外にも、コーパスから様々な示唆が得られた。たとえば、「足を洗う①」の用例数の年間推移を図2に示すことができる。

図2から分かるように、朝日新聞だけでなく、ほかの二社においても、毎年の用例数が増加したり、減少したりするなかで、1992年の用例数が最も多いのである。以下の例を手掛かりとして、その原因を考えたい。

- (24) 同本部に暴力団組員だという匿名の男から「来月1日に暴力団新法が施行され、警察の取り締まりが厳しいので、これを機会に足を洗

いたい。銃を福岡駅のコインロッカーに入れている」と電話があったため、捜査員が駅管理者にロッカーを開けさせたところ、布で巻いて紙袋に入れた銃を発見した。(1992/02/20朝刊)

1992年3月1日に暴力団対策法が施行され、朝日新聞記事データベースにヒットした1992年の記事には、警察相談電話に暴力団員本人やその家族、知人からの電話が殺到したというものが多い。また、警察の厳しい取り締まりに追い詰められ、暴力団員が動揺して暴力団をやめようと、駅のロッカーに銃を入れたとの事件も立て続けに報道されていた。この年には、暴力団対策法施行で暴力団の様変わりが目立ち始めた。暴力団を抜けた組員の就職が決まるなど、警察と市民をあげての支援活動もあいまって、同様のケースが非常に多い年であった。言語の使用状況は社会に連動して常に変化していることが示唆される。前掲例(1)のように、翌年以降も同様の事件が報道されていた。そのような社会状況を背景にして考えると、1992年が用例数のピーク時であることも理解できる。

新聞記事データベースを利用して調査を行う際、ある年において用例が急激に増えたりすることは、当時の社会問題を反映した結果であると考えられる。こうして考えれば、暴力団・やくざと共起する「足を洗う①」の用例数(131)は多少割引して考えるべきかもしれない。後藤(1993, 1995)が指摘したように、このことは新聞をこの種の調査の資料に使う際の1つの限界を示すものである。新聞記事データベースは言語学的な配慮をした上で構築されたコーパスではないため、新聞の特徴として、政治・経済・社会など特定の分野に関係する特定の表現が集中して現れる傾向を示すことがあるなど、デメリットが皆無というわけではない。しかし、「足を洗う」という表現に関する調査から、言語が社会と密接に関わっているということが示唆され、学習者用の辞書を考えれば、このような情報も有用である。

言葉の意味・用法は永久不変のものではない。冒頭で引用した二種の辞書記述に見られる食い違いは新しい意味・用法を追認するか否かによって生じたものである。このような意味・用法に変化が起こった言葉について、今後多くの事例研究を重ねていく必要がある。そして、その変化過程によって抽出される情報のなかで、有用性の高い情報を活用し、より正確な辞書記述や教材開発に活用することが期待される。

## 文献

- 荻野綱男(2007).『現代日本語学入門』明治書院.
- 河竹黙阿弥(1859/1961).小袖曾我薊色縫.浦山政雄,松崎仁(校注)『歌舞伎脚本集下(日本古典文学大系54)』岩波書店.
- 北原保雄(編)(2007).『明鏡ことわざ成句使い方辞典』大修館書店.
- 後藤斉(1993).「神話」の比喩的用法について——コーパス言語学からのアプローチ『東北大学言語学論集』2, 1-16.
- 後藤斉(1995).言語研究のためのデータとしてのコーパスの概念について——日本語のコーパス言語学のために『東北大学言語学論集』4, 71-87.
- 式亭三馬(1813-1823/1971).浮世床.中野三敏,神保五弥,前田愛(校注)『洒落本滑稽本人情本(日本古典文学全集47)』小学館.
- 十返舎一九(1802-1822/1958).麻生磯次(校注)『東海道中膝栗毛(日本古典文学大系62)』岩波書店.
- 新村出(編)(2008).『広辞苑(第6版机上版)』岩波書店.
- 杉本武(2010).コーパスを使った文法研究.砂川有里子,加納千恵子,一二三朋子,小野正樹(編)『日本語教育研究への招待』(pp. 177-192)くろしお出版.
- 砂川有里子(2010).コーパスを活用した日本語教育研究——日本語学習辞書編集に向けて.砂川有里子,加納千恵子,一二三朋子,小野正樹(編)『日本語教育研究への招待』(pp. 99-119)くろしお出版.
- 田野村忠温(2009).コーパスからのコロケーション情報抽出——分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作『阪大日本語研究』21, 21-41.
- 田野村忠温(2010).日本語コーパスとコロケーション——辞書記述への応用の可能性『言語研究』138, 1-23.
- 為永春水(1841-1842/1928).人情本.国民図書(編)『為永春水集(近代日本文学大系第20巻)』国民図書.
- 為永春水(1832-1833/1962).中村幸彦(校注)『春色梅兒譽美(日本古典文学大系64)』岩波書店.

日本国語大辞典第2版編集委員会, 小学館国語辞典編集部 (2000). 『日本国語大辞典第2版』小学館.

渋谷勝己 (2005). 現代の言語変化. 日本語教育学会 (編) 『新版日本語教育事典』 (pp. 464-465) 大修館書店.

宮地裕 (1982). 慣用句解説. 『慣用句の意味と用法』 (pp.237-265) 明治書院.

村田年, 山崎誠 (2011). 「手」の慣用句を指標とした文章ジャンルの判別——現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて 『日本語と日本語教育』 39, 75-88.

米川明彦, 大谷伊都子 (2005). 『日本語慣用句辞典』 東京堂出版.

#### 調査資料

(1) 上古・中古・中世・近世を中心とするもの (最終確認日 2015年8月12日)

・国文学研究資料館『大系本文 (日本古典文学・断本) データベース』

<https://www.nijl.ac.jp/pages/database/>

(2) 明治～戦前期を中心とするもの (最終確認日 2015年8月13日)

・インターネット図書館『青空文庫』

<http://www.aozora.gr.jp/>

・国立国語研究所近代語のコーパス

『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』

『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』

[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/cmj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/)

(3) 戦後期～現在を中心とするもの (最終確認期間 2015年8月14日～2015年8月16日)

・新聞記事データベース

朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』

<http://database.asahi.com/library2/>

毎日新聞記事データベース『毎索(マイサ

ク)』

[https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI\\_ipcu\\_menu.html](https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html)

読売新聞記事データベース『ヨミダス歴史館』

<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>

・国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』モニター公開データ (2009年度版)

添付資料：〈対象〉に当たる要素の度数順位 (一部のみ掲載)

#### ■「足を洗う」①

暴力団・やくざ (131)

強盗・スリ (37)

ギャンブル (19)

総会屋 (9)

売春・性産業 (8)

暴走族 (7)

麻薬 (5)

⋮

愛人暮らし (1)

アウトローの世界 (1)

討ち死に族 (1)

お酒一辺倒 (1)

財政難 (1)

精神の弛み (1)

タバコ (1)

遊興, 放蕩 (1)

#### ■「足を洗う」②

政治 (25)

芸能界 (16)

スポーツ界 (14)

株 (9)

ビジネス・投資 (6)

サラリーマン (4)

農業 (4)

⋮

稲作 (1)

飲酒後のラーメン (1)

カード (1)

介護 (1)

競走馬の生産 (1)

土 (1)

ヒマラヤ (1)

港 (1)

Article

Language change observed through the idiom  
“*ashi wo arau*”: A corpus approach

WU, Lin\*

Hokkaido University, Japan

Abstract

The idiom “*ashi wo arau*” has a wide variety of uses, as it can not only be used in regard to evil deeds, but also in regard to good. Examples taken from corpora reflect the changes in the usage of this idiom, which are caused by both internal and external linguistic factors. Although to grasp the full picture of language change it is necessary to investigate a number of expressions, in this paper, we take the idiom “*ashi wo arau*” as a singular example, using it to test an approach to language change as seen from the perspectives of one’s state of mind and social environment. As shown in previous studies, corpora play an important role in the compilation of dictionaries. In this paper, it is confirmed that the usage of “*ashi wo arau*” can be reliably analyzed using corpora. Thus, corpus data will contribute greatly to both lexical description in the dictionary and the development of teaching materials.

Copyright © 2015 by Association for Language and Cultural Education

*Keywords:* language change; factors; “*ashi wo arau*”; corpora; analysis of examples

---

\* E-Mail: gorin0819@hotmail.co.jp